

伸ばそう公共下水道



公共下水道工事にご協力ください

五條市では、公共下水道の使用できる地域を拡大するために、毎年整備工事を実施しています。

平成19年度は、北宇智駅踏切周辺、今井1・2・3・4丁目、須恵1丁目、野原西6丁目、二見1・2丁目、五條1丁目などで工事を予定しています。

現在、須恵1丁目、今井4丁目、野原西6丁目で工事を着手し、市民の皆さんには御迷惑をお掛けしていますが、工事看板やガードマン等の誘導にご理解とご協力をお願いします。

なお、今後着手する箇所についても事前に通行規制等を回覧文書や予告看板でお知らせします。

一日も早く水洗化を！ 水洗化の促進を行っています

五條市では、市民の皆さんが健康で快適な生活を送れるよう、また豊かな自然環境を守るため、昭和60年度から公共下水道事業に取り組み、すでに約4,300戸の家庭で下水道が使用されています。

現在、下水道を使用できる地域の皆さんに一日も早い水洗化工事のお願いに、未接続家庭への訪問を実施しています。

市民の皆さんのご理解ご協力をよろしくお願いします。

■問合先 下水道課計画係 ㊦(内線337)

新町と松倉豊後守重政

第8回 松倉重政よもやま話

今回は、松倉豊後守重政の人物像を理解する一助として、彼に関係する逸話を紹介します。

江戸時代初期の武将や徳川氏の家臣の言行・事績を述べた『明良洪範』という逸話・見聞集があって、その中には、以下のように松倉豊後守重政のことが記載されています。松倉豊後守重政は、生涯奢ることがなく、<武辺第一ノ人>でした。しかし、小大名である重政は、事ある時には戦の人数が不足します。それで、日ごろから浪人の武士でも<武辺ノ士>とは親しみ、共に出陣するようにも依頼し、もし軍功があれば君に推挙すると語っていたといひます。更に重政は、この<武辺ノ士>をしばしば集めては、彼ら浪士を饗応します。その時「飯八玄米飯、魚鳥八自身狷セシ物、野菜八自園ノ品、料理方ハスベテ粗ニシテ奢レル事ナク、只沢山ナルヲ要トシ、廿(二十)人ノ人数ニ八四十人ノ手当シ、我モ浪士モ一席二飲食」し、これ以外の四季折々の宴にも「衆ト共ニ楽」し、「士卒ヲ撫養スル事ヲ楽」しみにしていたということです。

この話から、どのような重政像をイメージされるでしょうか。粗食に甘んじて土地経営との結びつきから離れきっていない本来の武士、武辺を第一とし、戦に備えの怠らない戦国武将、武士身分の上下もまだ流動的で、自らも経験した可能性の高い浪人への気遣いのできる奢ることのない武将といった所でしょうか。

次は、『太閤記』(小瀬甫庵著：1661年刊)から、重政の記事を紹介します。

豊臣秀吉の家臣の古田吉左衛門(重則)は、天正7(1579)年の別所長治居城の三木城攻めの時に討ち死にを遂げます。戦死した重

則の子には古田重勝・重治兄弟がいましたが、兄の重勝が古田家を継ぎ、文禄4(1595)年には伊勢松阪に3万5千石を領し、更に関ヶ原の戦い後、5万5千石に加増されます。しかし、その重勝は慶長11年に47歳で没してしまいます。その重勝の長男重恒はわずか4歳(別の史料では6歳)であったため、重勝の弟重治が古田家を継ぐよう家康から命が下ります。にもかかわらず重治は、甥の重恒が成長するのを待ってからですが、家督を甥に譲って隠居してしまい、「物わびしきさまにて」江戸で暮らしました。このことに対して、松倉重政は以下のように評します。重治が甥に家督や財産を譲って隠居したのは、病身のために静かに暮らしたいと思ったのだろう、この身の処し方は当然であると。ところが、重治が都会である江戸で生活を送っていることを知ると、重治の隠居は病気などの具体的な障害があったからではなく、高い信念に基づいての行動であったと判断し直します。松倉重政と同席していた分部左京亮らは、この重政の評価に同意し感心したということです。

この逸話からはどのように思われるでしょうか。家康の命令に抗してまでも5万石以上の城主の地位を捨てるという事に対して、病身の故に世に厭いたからであろうとする松倉重政の考え方は、現実的で自然なイメージを持たせるに十分ではないでしょうか。当初は家督相続に対する何らかの信念に基づく行為だとは思えなかったのです。ところが、新しい事実を知ると、重治の態度は直接的な利害関係や障害などに対応した処世術的行為であったのではなく、ある種の高い信念を持った武将としての行動であったと評価し直す松倉重政でした(付け加えますと、松倉重政は、父を亡くした11歳の外孫(藤堂嘉次)に自分の領地から二千石分を与えています)。

(新町と松倉豊後守重政400年記念事業実行委員会委員 藤井正英)